

## 意外と知らない脾臓の話

肝硬変と切っても切れない関係にある臓器として脾臓があります。そもそも脾臓って何？といった方も多いと思われます。今回はそんなマニアックな臓器である脾臓と脾臓が関連する疾患についてお話します。

脾臓はにぎりこぶしほどの大きさをした軟らかい臓器で腹部の左上、横隔膜のすぐ下、左の肋骨のあたりに位置しています。心臓から大動脈を通過して脾臓へ血液を供給するのが脾動脈です。脾動脈によって脾臓へ運ばれた血液は脾静脈によって脾臓から運び出され門脈を通過して肝臓へと運ばれます。脾臓は主に血液中の古くなった血球を壊す働きをしています。その他にはリンパ球などを成熟させ、体の中に入った病原菌の対する抗体を作ることに関与しています。また細菌やウイルスなどを退治する白血球も存在しています。その他には白血球や血小板を貯蔵するような働きもあります。意外と知られていませんが、脾臓には様々な役割があるのです。

肝硬変になると門脈の圧が高くなるため脾臓へ血液がうっ血し、脾臓の機能が亢進した状態の『脾機能亢進症』を生じます。その結果として脾機能亢進症では、本来であれば古くなった血球を壊すはずが新しい血球まで壊されてしまい、貧血、白血球減少、血小板減少を呈します。肝硬変以外には、慢性的炎症性疾患や、白血病、溶血性貧血などの血液疾患なども脾腫や脾機能亢進症の原因となります。

交通事故などによる脾臓損傷や脾腫を引き起こす病気があり脾臓摘出が必要な人に対して脾臓を摘出することがあります。脾臓を摘出すると感染を防御する抗体をつくったり病原菌を血液から取り除いたりする体の能力がある程度失われます。そうすると感染に対する防御能力が低下してしまいます。特に脾臓には肺炎球菌、髄膜炎菌といった特定の種類の細菌に対する防御の役割があるため脾臓を摘出した場合は感染リスクが特に高くなります。このようなリスクがあるためにこれらの微生物の感染から体を守るために脾臓を摘出した方は毎年のワクチンを接種が勧められます。

最後に脾臓の腫瘍についてお話したいと思います。脾臓に腫瘍ができた人が知り合いにいるという方はいらっしゃいますでしょうか。臓に腫瘍ができること自体初めて知ったという

方も多いと思われます。それくらい脾臓の腫瘍は稀です。稀ではありますが悪性リンパ腫や転移性脾腫瘍といったような悪性腫瘍を生じることもあります。他には血管腫などの良性腫瘍がみられることもあります。脾臓の腫瘍の診断には超音波検査やCT検査などの画像検査がメインで組織診断は難しい臓器でしたが近年は超音波内視鏡検査を使用した生検方法もあり、我々も超音波内視鏡検査で診断した脾臓のサルコイドーシス症例を論文で報告しています。

このように脾臓は普段なかなか接することの少ない臓器ではありますが、今回の肝臓大学新聞で少しでも身近に感じていただければ幸いです。

文責 千葉 充

### [ CASE REPORT ]

#### Sarcoidosis with Splenic Involvement Diagnosed with Endoscopic Ultrasound-guided Fine-needle Aspiration

Hisanori Matsuzawa, Takashi Goto, Shigetoshi Ohshima, Tomomi Shibuya, Wataru Sato, Mitsuru Chiba, Kenichi Takahashi, Shinichiro Minami and Katsunori Iijima

